

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

—騎士に登用されるトリスタン—

Gottfrieds »Tristan und Isold«

—Über Tristans Einführung in den Ritterstand—

齋藤 芙美子

(1)

「優雅な教養」(höfsche lere)と「立派な芸」(guote liste)によって、マルケ王の宮廷社会で「信頼厚い一員」(ein trut gesinde)となったトリスタン少年¹⁾が、その養父ルーアルと再会することができ、その結果素姓が明らかとなり、マルケ王の手で騎士に登用される刀礼の儀式が授けられるまで(3757行から5068行)²⁾を本稿では取り扱う。ベヒシュタイン版³⁾ではVII. Wiedersehen(再会) VIII. Tristans Schwertleite(トリスタンの刀礼式)と呼ばれる箇所にあたる。この部分はゴットフリートの文学評論が展開される大変興味深いところで、ゴットフリートという詩人像を解明するために、いくつかの問題点を明らかにしていきたい。

忠義者ルーアルは「トリスタンを探し求めて、三年以上がたち、とうとう彼の容姿の美しさを失い、顔色もうせてしまった」⁴⁾が、四年目に入った時、トリスタンが森の道で出会ったあの二人の巡礼者に遭遇した。そしてトリスタンがコーンウォールに行ったことを聞き出すことができた。

コーンウォールのティンタヨーエルの都にたどりついたルーアルは、マルケ王の一行がミサから宮廷に帰るのを待ちうけて、一人の年配の家臣にトリスタンという子供がいるかどうかをたずねる。

‘ein kint?’ sprach jener al zehant
‘ine sage iu niht von kinde:
ein knappe ist hie gesinde,
3915 der sol schiere nemen swert
und ist dem künege harte wert,
wan er kan kunst genuoge
und erkennet manege vuoge

「子供？」とその人は直ちにいった、
「子供については何も申上げることはないが、
一人の若者ならこの家臣におりますよ。
もうすぐ刀礼の儀式をうけることになっており
王に大変重宝がられています。
と申すのもいろんな技にだけ
いろんな礼儀作法をわきまえており

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

<p>und manege höflichiu dinc: ³⁹²⁰ der ist ein starker jungelinc mit brunreidem hare. mit schoenem gebare und ist ein ellender man: den heize wir hie Tristan.'</p>	<p>いろいろな宮廷風の事柄に通じているからです。 あの者はたくましい若者で くり色の髪の毛をもち 態度物腰は立派であり 異国の者ですが、 われわれはここでトリスタンと呼んでおります。』</p>
---	--

上記の引用において注目しておきたいことは、トリスタンが間もなく刀礼式を受けるということ、即ち、騎士に任じられることが、マルケ王の家臣の口を借りて明記されている点である。

この時代の騎士の基準は「高貴な出身であること、力と健康と財産をもっていること、世間でも騎士社会でも評価と尊敬をえられること」⁹⁾にあったことを考えると、この段階のトリスタンは未だ高貴な出身とは判明していないし、財産もないのに、騎士に任じられようとしているということは、本論集第27巻ですでに触れたように、「新しいタイプの騎士」⁹⁾が存在しうることを、ゴットフリートは再び確認していると考えてよからう。

トリスタンと再会したルーアルは、マルケ王の面前で、トリスタンがリヴァリーンとブランシェフルールの愛の結晶であることを物語り、証拠としてブランシェフルールの指輪を差出したのである。甥の出現を喜ぶマルケ王に比べ、トリスタンは、ルーアルの告白によって本当の父は昔に死んでいたことが判明した上に、今まで実の父と信じていた人が父でないことがわかり、二人の父を共に失ってしまったことになるという嘆く。

これに対してルーアルは、自分の来たことによって、トリスタンの素姓が明らかになり、ますます尊敬されるようになるのだからという慰める。そしてトリスタンに騎士として登用してもらい、帰国の援助を下さるようにマルケ王に願い出るよう説得する。

ルーアルの口添えもあって、マルケ王がトリスタンの気持を問いかけたのに対して、トリスタンは次のように答える。

<p>⁴⁴⁰⁵ 'trut herre, ich sage iu minen muot: haet ich so rilichez guot, daz ich wol nach dem willen min und also ritter möhte sin, daz ich mich ritterliches namen ⁴⁴¹⁰ noch er sich min niht dörfte schamen und ritterlichiu werdekeit an mir niht würde nider geleit, so wolte ich gerne ritter sin, die müezige jugende min ⁴⁴¹⁵ üeben unde keren ze werltlichen eren;</p>	<p>「敬愛する殿、私の気持を申し上げます。 もしも私に十分豊かな財産があって、 まさにわが意志によって 騎士の名に恥じないような また騎士の名が私を恥じることのないような そんな騎士になりえるのなら、 そして騎士の名声か 私のためにおちることがないのであれば、 私はよるこんで騎士になり 無為に過しているわが青春を 利用して、この世の名譽を 求めていきたいと思います。』</p>
---	---

こういうトリスタンの決意をきいたマルケ王は、「いとしい甥トリスタン、自分を貧乏だと思ふことはない、なぜかといえば、パルメニーエはお前のものだ、私とお前の父上ルーアル殿

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

が生きておられる限り、いつまでもお前のものにちがいないのだから。』⁷⁾ という言葉に続けて、更に30行にわたって騎士に必要な「十分豊かな財産」(riches guot) に対する保証をトリスタンに与えている。

この保証を得て、ルーアルとトリスタンが刀礼式の準備を金銭をおしまず大々的にとりかかったことを記した後で、ゴットフリートは、金銭財産の使い方に関して老人と若者は滅多に一致しないものであるのに、どうしてルーアルとトリスタンは一致できたかを述べて、この章を終えるのである。

われわれは騎士となる日を迎えるまでのトリスタンを追ってきたのであるが、ルーアルとの再会によってトリスタンの高貴な出身が公にされたこと、また騎士に必要な「十分豊かな財産」をマルケ王から保証されたこと、その上引用したトリスタンの言葉から明らかなように、彼が「世の名誉」(werltliche ere) を重んじていることなどを知らされたのである。今ここに描き出されたトリスタンはこの時代の騎士としての基準、「高貴な出身、力、健康、財産、評価、尊敬」に合致した騎士像になっていることに読者は気付くであろう。それ故にこそ、先に触れたように、商人の息子として財産もないままに「もうすぐ刀礼の儀式をうけることになっている」とマルケ王の家臣に述べさせたゴットフリートの描写の新鮮さは、一層評価されなければならないであろう。ゴットフリートという詩人は時代を映す鋭敏な反射鏡であったといえる。

(2)

刀礼式へのぞもうとするトリスタンと彼の従臣となる三十人の者たちの「衣装とその衣装の立派さについて、それらがどのように仕立て上げられたかをたずねる人には、私は即座にこの物語の原典が語っている通りに話してきかせよう。もしも私が違ったことを話しているのなら、私の話に反駁して、これについてもっと上手に話すがいい。』⁸⁾ と大いなる自負をもって詩人は語り始める。それらの衣装が四種類の豊麗さ、即ち「その一つは高いところざし、もう一つは豊富な財産、第三はこの二つを裁ち合わせる識見、第四はこれら全てを縫い合わせる宮廷風の作法」⁹⁾ によって考案されていたという「詩人の熟慮された寓意的説明」¹⁰⁾ が展開されている。ところがこの直後にゴットフリートは読者の意表をつく大転換を行う。即ち、「その豊麗さについて、これ以上見事には語れないといえるほど立派に語るためには、私はどう始めたらよいかわからないのだ。』¹¹⁾ といっ、詩人はトリスタン物語の筋書きとは離れてしまうのである。

そして彼の同時代の詩人たちについて評論しはじめるのである。まずハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) を次のように称賛する。

Hartman der Ouwære

アウエのハルトマン、

ahi, wie der diu mære
 beid uzen unde innen
 mit worten und mit sinnen
 4625 durchverwet und durchzieret!
 wie er mit rede figieret
 der aventiure meine!
 wie luter und wie reine
 siniu cristallinen wortelin
 4630 beidiu sint und iemer müezen sin!
 si koment den man mit siten an,
 si tuont sich nahen zuo dem man
 und liebent rethem muote.
 swer guote rede ze guote
 4635 und ouch ze rehte kan verstan,
 der muoz dem Ouwære lan
 sin schapel und sin lorzwi.

このハルトマンへの称賛とは対照的に、続いてゴットフリートが繰り広げる非難の矛先はまことに痛烈である。

swer nu des hasen geselle si
 und uf der wortheide
 4640 hochsprünge und witweide
 mit bickelworten welle sin
 und uf daz lorschapelekin
 wan ane volge welle han,
 der laze uns bi dem wane stan;
 4645 wir wellen an der kür ouch wesen:

 4655 vindære wilder mære,
 der mære wildenære,
 die mit den ketenen liegent
 und stumpfe sinne sinne triegent,
 die golt von swachen sachen
 4670 den kinden kunnen machen
 und uz der bühsen giezen
 stoubine mergriezen:

 ob man der warheit jehen sol,
 dan gat niht guotes muotes van,
 4680 dan lit niht herzelustes an:
 ir rede ist niht also gevar,
 daz edele herze iht lache dar.
 die selben wildenære
 si müezen tiutære

あゝ なんとこの人は物語というものを
 外からも 内からも
 言葉と表現力で
 完璧にかざり 美しく仕上げることだろう!
 なんとうまい語り口で
 物語の真髄を描き出すことだろう!
 あの水晶のような言葉は
 なんとすきとおって なんと濁りのないことか
 またいつまでもそうあり続けるに違いないのだ!
 その言葉は控え目に人に近づき
 ぴったりと寄りそい
 立派な心をたのしませる。
 立派な語り口を 善意をもって
 正しく理解できる人は
 このアウエの人に
 栄冠である月桂冠を許すにちがいない。

さて兎の仲間のように
 言葉の花咲く広野で
 言葉のさいころをふりまわして
 とびはねまわろうとし
 月桂冠を
 同意も得られないのに欲する者は
 我々がわが見解に固執するのを許さねばならない
 我々にも選ぶ権利はあると思う。

 野卑な物語のつくり手たち
 物語のまがいものづくりたち
 奇術の鎖であざむいて
 頭の弱い者をだまし
 つまらぬものから黄金を
 子供たちにつくって見せることができ
 奇術の箱から
 塵でできた真珠をふり出して見せる者たち

 本当のことを云えというのなら
 そこからは心楽しい気分が生じることもないし
 そこには心のよろこびがあるのでもない。
 彼らの物語は ところろ気高い人が
 それを聞いて微笑むというようなものではない。
 この物語のまがいものづくりたちは
 注釈者というものを

4685 mit ir mæren lazen gan:	その物語につけねばならない。
wirn mugen ir da nach niht verstan,	その物語を聞いても読んでも
als man si høeret unde siht;	われわれには理解できないのだ。
son han wir ouch der muoze niht,	だが、注釈を
daz wir die glose suochen	魔法の本で探すような
4690 in den swarzen buochen.	そんな暇間はわれわれにはない。

このような痛烈な非難の矛先を向けた「野卑な物語のつくり手たち」(vindære wilder mære) に対して、ゴットフリートはその名前を明らかにしていないのである。しかしこれは、ゴットフリートと並んで中世のドイツ宮廷叙事文学を代表するヴォルフラム・フォン・エツシエンバハ(Wolfram von Eschenbach) であるといわれている。ゴットフリートがこの文学評論の冒頭にハルトマンへの称賛とヴォルフラムへの非難を並記したのは、シュレーダー(Walter Johannes Schröder) の見解によれば、「ヴォルフラムがその『パルチヴァール』の中で非難しているハルトマンをまず最初に取り上げることによって、ゴットフリートはヴォルフラムに対して勝負をいどんだのである、だからその後でやっと他の詩人たちを記述している」¹²⁾ ということになる。ゴットフリートがヴォルフラムの『パルチヴァール』を読んだことがあったのかどうかという論争は今なお決着を見出していないのであるが、「ゴットフリートがこの作品をかいた時、『パルチヴァール』の初めの6巻を、即ちプロローグや二度にわたるハルトマン非難やその彎曲的比喩については少くとも知っていた」¹³⁾ から、ハルトマンへの称賛とヴォルフラムへの非難を対照させたのだとシュレーダーは主張している。更にシュレーダーは、「ゴットフリートのヴォルフラム攻撃というのは一方的なものであって、ヴォルフラムは実際のところ自己弁護は一切していない。ヴォルフラムの方が年長者であって、ゴットフリートが書き始めた時にはすでにその名声は確立していたのであり、ヴォルフラムが考慮を払わなければならない大先輩というのはハルトマンであって、ゴットフリートではなかった」という点を指摘している。

さて、ハルトマンへの称賛と「野卑な物語のつくり手たち」への非難から、ゴットフリートが、「プロローグ」の中で語ったと同様に、「立派な心」(rehtem muote) を、「こころ気高い人」(daz edele herze) を楽しませる物語を最も高く評価している点にわれわれは改めて注目しなければならない。「こころ気高い人」が受け入れることの出来る物語とは、ハルトマンのように「言葉と表現力で」(mit worten und mit sinnen)、「すきとおって」(luter)「濁りのない」(reine)「水晶のような言葉」(siniu cristallinen wortelin) で語られたものであって、「注釈者」(tiutære) をつけなければ理解できないような物語ではないとゴットフリートは主張している。

ハーン(Ingrid Hahn) が指摘するように、「ゴットフリートは、sin という言葉でもって、対象の質(内容、意図、様式)というようなものではなく、詩人の能力、即ち素材の単なる配列をこえて、世間に正しい解釈をさせる能力を理解してもらおうと欲している」¹⁴⁾ と考えられ

るので、筆者はこの言葉を「表現力」と訳したのである。

ゴットフリートにとっては、「注釈」(die glose)を「魔法の本で」(in den swarzen buochen)探さなければならぬような物語の作者というのは「言葉」(wort)と「表現力」(sin)に欠けているのであって、そういう作者が「物語のまがいものづくりたち」(der mære wildenære)というわけである。

しかしゴットフリートの同時代の詩人たちが、このような「物語のまがいものづくり」ばかりであったのではなかった。

von Steinahe Bliker,
 diu sinen wort sint lussam.
 si worhten vrouwen an der ram
 4695 von golde und ouch von siden,
 man möhtes undersniden
 mit criecheschen borten.
 er hat den wunsch von worten:
 sinen sin den reinen
 4700 ich wæne daz in feinen
 ze wundere haben gespunnen
 und haben in in ir brunnen
 geliutert unde gereinet:
 er ist binamen gefeinet.
 4705 sin zunge, diu die harpfen treit,
 diu hat zwo volle sælekeit:
 daz sint diu wort, daz ist der sin:
 diu zwei diu harpfent under in
 ir mære in vremedem prise.

シュタイナハのブリッカー、
 彼の言葉は優美である。
 まるで婦人たちがその言葉を
 金糸や絹糸で刺繍したとでもいえようか。
 ビザンティン風の縁かざりで
 それらをかざりたててみたいものだ。
 彼は言葉の完璧な使い手だ。
 その濁りのない表現力は、
 思うに、妖精たちが
 不思議な方法で織り上げ
 泉で それを
 すきとおって 濁りのないようにしあげたのだ、
 いうならば妖精たちによって与えられたのだ。
 ハープをかなでるような彼の舌は
 二つの豊かな天賦の才もっている、
 それは言葉であり 表現力である。
 この二つがいっしょになってハープに合せ
 前代未聞のみごとさで物語を奏でている。

このブリッカー (Blicker von Steinach) に対する 称賛の中でも、ハルトマンの場合と同じく、wort と sin を繰り返し強調している。そして「濁りのない」(rein) という同じ付加語や「すきとおって濁りのないようにしあげる」(geliutert unde gereinet) のような同一語根の言葉でもって、ハルトマンの場合と同様に wort や sin の属性を明確にしている。更に、「ハープをかなでるような彼の舌」(sin zunge, diu die harpfen treit) は wort と sin をもっているということが明らかになることによって、zunge も wort も sin もゴットフリートにあっては殆ど同一の概念を表現していると考えてもよからう。しかも「ハープをかなでるような」という表現は、耳に快く響く「詩人的明晰な発音プロセス」¹⁵⁾ をゴットフリートが求めていたことを明らかにしている。従って wort や sin の属性と考えられる「すきとおって」(luter)「濁りのない」(reine) という概念は「ハープをかなでるような」響きをも同時に包含したものでなければならないというゴットフリートの美学を象徴しているといえるであろう。

続いてゴットフリートが文学評論の対象とした詩人たちというのは、ハインリヒ・フォン・フェルデケ (Heinrich von Veldeke)、ラインマル・フォン・ハーゲナウ (Reinmar von Ha-

genau)、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide) の三人である。

von Veldeken Heinrich
 der sprach uz vollen sinnen;
 wie wol sanger von minnen!
 wie schone er sinen sin besneit!
 4730 ich wæne, er sine wisheit
 uz Pegases ursprunge nam,
 von dem diu wisheit elliu kam.

 er inpfete daz erste ris
 in tiut(i)scher zungen:
 4740 da von sit este ersprungen,
 von den die bluomen kamen,
 da si die spæhe uz namen
 der meisterlichen vûnde;

フェルデケのハインリヒ、
 この人は完璧な表現力で語った。
 なんと上手に恋をうたいあげたことか!
 なんと美しくその表現力を磨きあげたことか!
 思うに、彼はそのわざを
 ペガサスの泉から手に入れたのだろう。
 その泉からすべてのわざが生まれてきたのだ。

 彼は最初の接ぎ穂を
 ドイツ文学の木にさしたのだ、
 そこから のちに枝がのび
 それから 花がつき
 そこから 詩人たちは手本とすべき文芸の
 うでまえを学びとったのだ。

このように「最初の接ぎ穂をドイツ文学の木にさした」と評価しているフェルデケは、ゴットフリートにとっては「会ったことはない」¹⁶⁾ 大先輩であるが、ドイツの「宮廷文学は、ハインリヒ・フォン・フェルデケにその源を発し、ハルトマン・フォン・アウエにおいて完成したことを、接ぎ穂、枝、花という木のメタファーで」¹⁷⁾ 表現して、フェルデケに対する敬意を表している。

このフェルデケの場合にも、ゴットフリートはその完璧な「表現力」を、美しく磨きあげられた「表現力」をたたえ、そのわざをフェルデケがすべての文芸の源である「ペガサスの泉」から手に入れたのだろうと謳っている。ここにおいて、読者は初めてゴットフリートの称賛する *wort* と *sin* がギリシヤ古典世界に連なっていることを象徴的に暗示されるのである。

ペガサスの泉の流れを受け継いだフェルデケからブリッカーを経てハルトマンへのドイツ叙事詩の流れをゴットフリート自身が正統派とみなしていることを「木のメタファー」をつかって表明した後、次に詩人はジャンルの異なる叙情詩人について、彼らをナイチンゲールと呼びながら次のように語っている。

welhiu sol ir baniere tragen,
 sit diu von Hagenouwe,
 4780 ir aller leitevrouwe
 der werlde alsus geswigen ist,
 diu aller doene houbetlist
 versigelt in ir zungen truoc?

 4790 ich wæne, Orphees zunge,
 diu alle doene kunde,
 diu doenete uz ir munde.

誰が彼らの旗をかつぐというのだろうか。
 ハーゲナウのナイチンゲールが
 あのみんなの導き手が
 この世から口をとぎして以後は。
 あの子はすべてのメロディーの完璧なわざを
 その舌に秘めていたのに。

 思うに、オルフォイスの舌が
 すべてのメロディーを可能にしたのであって、
 あの子の口からもメロディーを奏でたのだ。

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

このように叙情詩人ラインマル・フォン・ハーゲナウについても、「オルフォイスの舌」(Orphees zunge) がメロディーを奏でたという表現で、ギリシヤ古典世界との関連性を暗示するとともに、zunge という言葉を用いることによって、既に述べたように、ゴットフリートが称賛しつつけてきた wort と sin 及びその属性を全て包括した概念を読者に連想させるのである。

ラインマル亡き後の叙情詩人の第一人者としてゴットフリートが最後に評論した詩人はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデである。

<p>wer leitet nu die lieben schar? wer wiset diz gesinde? ich wæne, ich si wol vinde, diu die baniere vüeren sol: 4800 ir meisterinne kan ez wol, diu von der Vogelweide. hi wie diu über heide mit hoher stimme schellet! waz wonders si stellet! 4805 wie spæhes organieret! wies ir sanc wandelieret (ich meine aber in dem done da her von Zytherone, da diu gotinne Minne 4810 gebiutet uf und inne)!</p>	<p>誰が今この愛すべき群れを導くのか、 誰がこの仲間のかじ取りをするのか。 私はその旗をかつぐべき人を よく承知していると思う。 彼らの指導者になりうるのは フォーゲルヴァイデのあの鳥だ。 あゝ、あの鳥は荒野の上で なんと朗々とした声をひびかせることか! なんとという不思議をつくり出すことか! なんと上手にいろんな声でうたえることか! なんといろんな節まわしでうたえることか! (思うに あのメロディーは キテロン山の 愛の女神のこもり給えるところより 流れおりてきているのだ。)</p>
--	--

ここでもゴットフリートはヴァルターの素晴らしいメロディーを「キテロン山の愛の女神のこもり給えるところ」から由来すると述べている。ゴットフリートは愛の女神アフロディーテの住むキテラ島のことを、キテロン山と取り違えているのであるが、これは中世時代の他の作品にもよく見られる取り違えであるといわれている¹⁸⁾。ラインマルの場合と同様に、ヴァルターの中にもギリシヤ古典世界との連続性をゴットフリートが認めようとしていることは明らかであろう。

(3)

叙事詩においてフェルデケからブリッカーそしてハルトマンへの流れを正統派と評価し、叙情詩においてはラインマルとヴァルターをその旗手と称賛したゴットフリートは、自分自身をどのように位置づけようとするのであろうか。

<p>Nu han ich rede genuoge von guoter liute vuoge gevtiegen liuten vür geleit. ie noch ist Tristan umbereit</p>	<p>さて私はもう十分に 立派な人々の腕まえについて 理解ある方々に物語ってきた。 だが まだトリスタンは</p>
--	--

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

4825	ze siner swertleite. ine weiz, wie in bereite: der sin wil niender dar zuo; son weiz diu zunge, waz si tuo al eine und ane des sinnes rat, 4830 von dem sir ambet allez hat.	その刀礼式の用意がととのわない。 私は彼をどう準備させたものかわからない。 表現力がどうしてもでてこない。 だから舌もひとりでは 表現力の助けなしには どうしてよいのかわからない、 表現力から舌の役割も全てでてくるのだから。
4835	dem man, der niht wol reden kan, kumt dem ein redericher man, im erlischet in dem munde daz selbe, daz er kunde.	上手に語りえない者には 上手な語り手があらわれると かつて語りえたことすら 口からでなくなってしまうのだ。
	nun weiz ich, wies beginne: min zunge und mine sinne 4855 dien mugen mir niht ze helfe komen; mir ist von worten genomen enmitten uz dem munde daz selbe, daz ich kunde.	今私はどう始めてよいのかわからないのだ。 私の舌も 私の表現力も 私を助けてくれることができないのだ。 私の口の中から かつて私がつかっていた 言葉自体がうばわれてしまったのだ。

このようにゴットフリートは、彼の尊敬する詩人たちを前にしては、彼の「表現力」(sin)がどうしても出てこない、それ故「舌」(zunge)も働きを失って、「言葉」(wort)を奪われてしまったと告白している。

ここでもゴットフリートは、評論の対象としてきた詩人たちの場合と同様に、sin、wort、zunge という同じ尺度で自己に対する評価を下そうとしていることがうかがえる。しかもこのsin、wort、zunge という尺度はギリシヤ古典世界に源流をもつ美的概念であることはすべに述べてきたところであって、今や「私の舌も私の表現力も私を助けてくれることができない」と嘆くゴットフリートが、ギリシヤ古典世界へ向って、次のような祈願をするのは当然の帰結というべきであろう。

	mine vlehe und mine bete die wil ich erste senden mit herzen und mit henden 4865 hin wider Elicone ze dem niunvalten trone, von dem die brunnen diezent, uz den die gabe vliezent der worte unde der sinne. 4870 der wirt, die niun wirtinne, Apolle und die Camenen, der oren niun Sirenen, die da ze hove der gaben pflegent, ir genade teilent unde wegent, 4875 als sir der werlde gunnen,	私の祈りと 願いを 今はじめて 心をこめ 手を合せて 送り届けよう ヘリコンの山に向って、 あの九重にかさなり合う玉座に向って あそこから泉がわき その泉から言葉と表現力という 天賦の詩才が流れでてくるのだ。 あの山のあるじと女あるじたち アポロとミューズの女神たち、 耳をあやつる九人の女神たち あの山の宮殿で詩才をつかさどり その恵みを分け この世の人に思いのままに与える女神たち、
--	---	--

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

die gebent ir sinne brunnen so vollecliche manegem man daz si mir einen trahen da van mit eren niemer mugen versagen. 1890 und mag ouch ich den da bejagen, so behalte ich mine stat da wol, da man si mit rede behalten sol.	あの女神たちはその英知の泉の水を 多くの人々にこんなにとっぷりと与え給うのだから 私に対してもその一滴を 名誉にかけても拒むことはなさるまい。 そして私もその一滴を手に入れられるなら 物語に応じて占めるべき席に 私も自分の席をもつことができよう。
dis selben gotes gabe des waren Elicones, des oberesten trones, von dem diu wort enspringent, 4900 diu durch daz ore clingent und in daz herze lachent, die rede durchliuhtec machent als eine erwelte gimme, die geruochen mine stimme 4905 und mine bete erhœeren oben in ir himelkœeren und rehte als ich gebeten han!	神のこの恩寵 まことのヘリコンの恩寵 言葉がわきでる あの至高の王座の恩寵が 耳を通してごだまし 心をなごませ 物語を高価な宝石のように 輝かせるのだが、 どうかこの恩寵が私の声と願も きき入れ給わんことを、 あの上の九人の天使の合唱する所で まさに私の祈った通りに!

ゴットフリートはヘリコンの山のアポロと九人のミューズの女神たちに向って、「言葉」と「表現力」という「天賦の詩才」(gabe)の流れ出てくる泉の水の一滴を与え給えと祈願している。この祈願において、wort と sin はアポロとミューズの賦与する gabe であると明言することによって、ゴットフリートは彼の追い求める詩的模範がギリシヤ古典世界にあることをあらためて読者に印象付ける。そして彼は多くの詩人たちに与えられたミューズの泉の一滴を、もしも彼自身にも与えられるならば「自分の席をもつことができよう」と宣言している。ここにはゴットフリートの祈願にかくされている彼自身の自負、すなわちギリシヤ古典世界の泉からの流れをドイツ叙事詩に受け継いだフェルデケ——ブリッカー——ハルトマンという正統派の後継者は彼自身であるという自負が読みとれるのである。

(4)

ではゴットフリートがアポロとミューズの支配する泉から流れでてくるとした wort と sin という gabe とは、どのような詩才をさしたのか、今一度ふり返ってみたい。

それは「こころ気高い人」(daz edele herze) を楽しませることのできる「水晶のような」(crystallin)「すきとおった」(luter)「濁りのない」(reine)、「ハープをかなでるような」快よい響を伴い、「注釈者」をつけなくとも理解されるような表現法をさしたと考えられる。ウェーバー (Gottfried Weber) の言葉をかりるならば「修辞上の文体技法」¹⁹⁾ をさしていたと

いえよう。

ウェーバーはゴットフリートの求めている文体技法は「12世紀の人文主義派からでた文体技法」²⁰⁾ であると明確に断定しているのに対して、ゴットフリートの中にこの時代のキリスト教神学の影響をもつと色濃く認める研究者もある。

例えば、ハーンは、ミューズの女神への祈願の中でヘリコンの山の泉から流れ出る一滴が wort と sin という天賦の詩才であるというゴットフリートの思考過程の中に、神学的文学のもっている「流出観念」²¹⁾ すなわち「魂の内なる想念を、泉が湧きおこり、その泉が流れて他の魂にそそがれるような光景として」理解するという神学的文学の思考法を認めている。そしてゴットフリートのミューズへの祈願に「二つの異ったヘリコン観念」²²⁾ すなわち4865行の「ヘリコン」と4897行の「まことのヘリコン」という二つの異った観念があると解釈することによって、神学的文学の伝統の泉を意味する「内的なる場所」²³⁾ を書き換えたのだと主張している。

このミューズ祈願の解釈をめぐる、ハーンよりも一層キリスト教的色彩を強く主張している研究者にコルプ (Herbert Kolb) がいる。コルプはこのミューズ祈願は二つの祈願から成り立っているとみなす。第一の祈願 (4862行から4879行) では「古典的 ミューズ祈願の印象」²⁴⁾ を与えるのに対し、第二の祈願 (4896行から4907行) は「まことの」(war)、「至高の」(oberest)、「天使の」(himel) という最高級を示す付加語を用いることによって、「第一の祈願の昇華」²⁵⁾ を表現しているとコルプは主張する。そして12世紀中頃の説教集からの類例を引用しながら、このような最高級を示す付加語を用いる表現法はキリスト教的祈願の表現様式であり、第二の祈願の「どうか私の声と願もきき入れ給わんことを」というのは、「キリスト教的意味での神性に向けられている」²⁶⁾ と結論づける。更に、ゴットフリートが「神の恩寵」、「至高の玉座の」、「天使の合唱」というキリスト教的用語にまじって、異質的なヘリコンという異教的ギリシヤの名前に war (まことの) という付加語をわざわざ付けている意義をコルプは考察している。そして中世時代の旧訳聖書、新約聖書の比喩的記述法では固有名詞に付加語の wahr (まことの) をつけることがあり、その人物が「キリストの中に自己の完結した姿を見出している」²⁷⁾ ような場合に、このような用法が用いられたことを論証する。

旧訳・新旧聖書ばかりでなく、この12世紀のラテン語による中世文学の寓話作者や神学者の著書の中にも、最高級を表す付加語をつけてギリシヤ神話に出てくる固有名詞やギリシヤの哲人の名前が出てくるが、その場合も「キリスト教的神やその属性が示されている」²⁸⁾ とコルプは論じる。従って、「die selben gotes gabe des waren Elicones に対するゴットフリートの第二の祈願はギリシヤ古典の意味でのミューズへの祈願を示すのではなくて、三位一体の神へ向けられているのは疑いない」²⁹⁾ とコルプは主張している。

このように、ゴットフリートの wort と sin を求めた祈願に対して、ウェーバーのように人文主義者としてのゴットフリートの祈願とみる立場もあれば、ハーンやコルプのように中世

のキリスト教徒としての祈願とみる立場もあるのだが、ゴットフリート自ら語ったように「水晶のような」「すき透った」「濁りのない」文体技法という詩才を祈願したのは疑いないところである。詩人自ら「注釈者」をつけなければ理解できないような「野卑な物語のつくり手たち」を非難したように、また自らをフェルデケ——ブリッカー——ハルトマンの後継者と位置づけたように、彼の語る言葉をも読者が「水晶のように」「すきとおった」「濁りのない」ものとして読みとることを詩人は最高の望みとしていたのではなからうか。それ故に、ゴットフリートが「水晶のような」「すきとおった」「濁りのない」wort や sin の源はギリシヤ古典世界にあるとくり返した言葉は、その通りに理解すべきであろう。そしてそのような wort や sin を求めて、「神のこの恩寵」「まことのヘリコンの恩寵」「言葉がわきでるあの至高の玉座の恩寵」と並記して祈願している対象は、詩人の心の中に存在した全ての神、キリスト教の神、ギリシヤの異教の神々、全ての神であると読みとることができるのではなからうか。このように読者に全ての神を包括していると理解することを可能にしている事実こそが、「水晶のような」「すきとおった」「濁りのない」文体技法の成果だといえるであろうと筆者は考える。

またこの一見不調和なギリシヤの異教の神々とキリスト教の神とを、共に祈願の対象となしうるゴットフリートの包容力を理解することが詩人の本質に近づく道でもと思われる。ゴットフリートの生きていた1200年ごろという時代が内蔵していた問題性、つまりデ・ボーア (Helmut de Boor) の指摘している「現世と神の新しい均衡の秩序が必然的な要求として生じて」³⁰⁾ きつつあった転換期の騎士社会の問題性がゴットフリートにこのような包容力を与えたのではなからうか。ここにも時代を映す鋭敏な反射鏡としてのゴットフリートを見る思いがする。

トリスタンの刀礼式を描こうとして書き始めたこの章を、突如同時代の詩人に対する文学評論に切りかえるという「まわり道をした目的は自らの芸術家としての位置を性格づけること」³¹⁾であったのだから、目的を果たした詩人はトリスタンの刀礼式の描写を「私は才能が乏しく」³²⁾「あきらめねばならない」³³⁾ という口実のもとに打ち切ろうとする。そして既に引用したトリスタンを飾る四つの要件、「ころざし」(muot) と「財産」(guot)、「識見」(bescheidenheit) と「官廷風の作法」(höfsche sin) を再び寓意的に説明した後に、マルケ王の祝福の言葉を簡単に伝えるだけである。ただ作者として、新しく騎士となったトリスタンとその従臣たちに、「どうしても彼らにしてやりたい私の務めを一つだけ示すことにしよう、つまり彼らみんなの名誉がすべての点で高まり、神が彼らに騎士道に合った騎士らしい生活を与え給わんよう祈ることである」³⁴⁾ という言葉をつけ加えて、この章を終えている。

註

- 1) 研究論集第27巻21頁拙稿参照。
- 2) Gottfried Weber: Gottfried von Strassburg Tristan, Text, Nacherzählung, Wort und Begriffserklärungen. 1967から引用。

- 3) Gottfried von Strassburg, *Tristan*, Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein hrsg. von Peter Ganz. 1. Teil 1978.
- 4) 3786-3790.

vorschende nach Tristande
wol driu jar oder mere,
biz daz er also sere
von sines libes schoene kam
³⁷⁹⁰ und an der varwe als abe genam:
- 5) Friedrich Maurer: *Leid*, 4. Auflage 1969 S. 256.
- 6) W. T. H. Jackson: *Tristan the artist in Gottfrieds poem*, *Publications of the modern language association of America* 77, (1962) (*Wege der Forschung* Bd. cccxx, 1973 S. 288).
- 7) 4455-4459.

⁴⁴⁵⁵ vil lieber neve Tristan,
nim dich niht armuotes an;
wan Parmenie daz ist din
und muoz din eigen iemer sin,
sol ich und din vater Rual leben.
- 8) 4555-4562.

⁴⁵⁵⁵ Swer mich nu vraget umbe ir cleit
und umbe ir cleider richeit,
wie diu zesamene wurden braht,
des bin ich kurze bedaht,
dem sage ich, als daz mære giht.
⁴⁵⁶⁰ sage ich im anders iht,
so widertribe er mich dar an
und sage er selbe baz da van:
- 9) 4567-4572.

daz eine daz was hoher muot;
daz ander daz was vollez guot;
daz dritte was bescheidenheit,
daz dritte was bescheidenheit.
⁴⁵⁷⁰ diu dise(n)zwei(n) zesamene sneit
daz vierde daz was höfscher sin,
der næte disen allen drin.
- 10) G. Weber: *ibid.*, S. 604.
- 11) 4612-4615.

ine wiste wie gevahen an,
daz ich von richeite
so guotes iht geseite,
⁴⁶¹⁵ mane hæte baz da von geseit.
- 12) Walter Johannes Schröder *vindaere wilder maere zum Literaturstreit zwischen Gottfried und Wolfram*, *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 80. Band (1958) S. 285.

- 13) W. J. Schröder: *ibid.*, S. 286.
- 14) Ingrid Hahn: Zu Gottfrieds von Strassburg *Literaturschau*, *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 96 (1967) (*Wege der Forschung* Bd. cccxx, 1973 S. 426).
- 15) I. Hahn: *ibid.*, S. 430.
- 16) 4733 *ine han sin selbe niht gesehen;*
- 17) I. Hahn: *ibid.* S. 446.
- 18) R. Bechstein: *ibid.*, S. 349.
- 19) Gottfried Weber: Gottfrieds Tristan in der Kreis des hochmittelalterlichen Weltbildes um 1200, *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 82 (1948/50) S. 387.
- 20) G. Weber: *ibid.*, S. 387.
- 21) I. Hahn: *ibid.*, S. 440.
- 22) I. Hahn: *ibid.*, S. 444.
- 23) I. Hahn: *ibid.*, S. 444.
- 24) Herbert Kolb: Der ware Elicon Zu Gottfrieds Tristan vv. 4862-4907, *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 41 (1967) (*Wege der Forschung* Bd. cccxx, 1973 S. 459).
- 25) H. Kolb: *ibid.*, S. 461.
- 26) H. Kolb: *ibid.*, S. 465.
- 27) H. Kolb *ibid.*, S. 466.
- 28) H. Kolb: *ibid.*, S. 477.
- 29) H. Kolb: *ibid.*, S. 482.
- 30) Helmut de Boor: Die Grundauffassung von Gottfrieds Tristan, *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 18 (1940) (*Wege der Forschung* Bd. cccxx, 1973, S. 30).
- 31) Ursula Schulze: Literarkritische Äusserungen im, Tristan Gottfrieds von Strassburg, *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 88 (1967) (*Wege der Forschung* Bd. cccxx, 1973 S. 517).
- 32) 4924 *so cleine als ich gesinnet bin,*
- 33) 4928 *deiswar ich sol es haben rat.*
- 34) 5063-5068

*wan einen dienst biute ich in,
des ich in sere willic bin:
5065 daz sich ir aller ere
an allen dingen mere
und in got ritterlichez leben
zir ritterschefte müeze geben!*

その他の参考文献

- Kürschners *Deutsche National-Literatur* 4. Bd.
- Gottfried von Strassburg, *Tristan*. Hrsg. von Karl Marold (Walter de Gruyter 1977).
- Gottfried von Strassburg, *Tristan*, Übersetzt von Xenja von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel: (Wilhelm Fink Verlag 1979).
- Gottfried von Strassburg, *Tristan*. Translated entire for the first time. (Penguin Books 1972).
- トリスタンとイゾルデ 石川敬三訳 都文堂1976.